

平成30年度第2回学校関係者評価委員会報告

10月に、本校会議室において「第2回校内評価委員会」を開催し、その後10月下旬に「第2回学校関係者評価委員会」として、学校評議員の方々に紙面で報告しご意見を伺いました。

学校評議員の方々より特にご意見はいただきませんでしたので、各評価対象の取組の中間報告と今後の課題について、報告いたします。

◆本校の課題（再掲）

- (1) 中学部から高等部本科・専攻科までの一貫教育を通して、自立と社会参加に向けた教育活動を展開する。
- (2) 生徒の障害特性や発達段階に応じて教育課程を工夫・改善するなど、個に応じた指導を一層展開する。
- (3) 障害の状態等に応じ、音声、文字、手話等のコミュニケーション手段の適切な活用を図り、確かな日本語力をもとにした豊かなコミュニケーション力を育成する。
- (4) 基礎学力の向上に努めるとともに、生活に生きる学力となるようにする。
- (5) 保護者や関係諸機関と連携し、「個別的教育(移行)支援計画」の作成・実施・評価を適正に行い、個々の生徒のニーズに応じた指導・支援を展開する。
- (6) 小・中・高等学校の要請に応じて、聴覚障害のある児童生徒に対する教育相談、通級による指導を行うなど、地域の聴覚障害支援センターの役割を果たす。
- (7) 魅力ある学校、特色ある学校、さらに開かれた学校づくりを進めるために、学校評価を通して、教育内容の質的向上を図る。
- (8) 多忙化解消に向けて、施錠時間や月3回の定時退校日を徹底する。また、業務の効率を図るため、職員全体で見直しを進める。

◆めざす学校像（再掲）

『生徒一人一人の自己実現のために、安定して継続した学びができる学校』

- (1) 基礎学力の向上、継続した学び支援
 - ・生徒の実態把握に努め、適切で実行可能な教育計画・指導計画を作成する。
 - ・生徒一人一人の実態に応じた分かりやすい授業をめざし、常に授業改善に努める。
 - ・多様なコミュニケーション方法を用いて、言語活動の充実を図る。
 - ・タブレット端末の活用など、ICT教育をより一層推進する。
 - ・多様なニーズに応じた教育課程を編成する。
- (2) 生徒に寄り添った生徒指導
 - ・自分を大切にできる心、人を思いやる心、感謝する心を育成する。
 - ・いじめ等の早期発見、早期対応に努める。
 - ・生徒指導上の問題に対し、教職員の共通理解の下、学校として迅速に対応する。
 - ・保護者と問題を共有し、関係機関等との連携を深める。
- (3) 生徒の適性を重視したキャリア教育
 - ・個々の障害や発達段階に応じたキャリア教育を充実する。
 - ・多様な進路に対応できるように、情報の収集と発信に努める。
 - ・挨拶やマナーの定着を図る。

◆各評価対象の中間報告

◀授業改善に向けた取組▶

教科	重点目標	具体的方策	留意事項
国語	<ul style="list-style-type: none"> 理解し、使いこなせる語彙を増やし、文章読解や作文の基礎的な力を伸ばす。 	<ul style="list-style-type: none"> 漢字テストと併せて語句の意味テストを行う。 授業の中で、語句の意味を説明したり対義語や類義語を学習したりする機会を設け、語彙の拡充を図る。 生徒の実態に応じて、辞書の引き方やノートの書き方、板書の視写の仕方、小テストに向けた勉強の仕方などを指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> 中学部、高等部全学年共通で取り組む。 各学年で語句のテストの作成を行い、データの共有をして今後も活用できるようにする。 学習の内容を振り返り、繰り返し学習できるように小テストの内容を定期テストで出題する。

中間報告

中学部

漢字テストの他に語句の意味テストを週1回程度行っている。過年度から使用しているテストに、少しずつ改良を加えながら取り組んでいる。新出語句の意味確認→漢字テスト→語句の意味テストのサイクルが定着しつつある。定期テストには、漢字テストと併せて意味テストからも出題している。生徒が自分の言葉で、新出語句の意味や用法を説明することを継続的に行っており、少しずつ成果が出てきている。

高等部

高1→单元ごとに語句の意味テストを行っている。定期テストにも出題している。

高2→毎時間1回程度、重要語句の意味説明を行い、定期テストで出題している。

高3→週1回程度、漢字テストと意味テストを行っている。1学期に行っていた意味テストはやや難しく、2学期から出題の仕方を変更した。(下記参照)

高等部専攻科

専1→小テストに出題する語句の意味を授業で解説した上で、次時に小テストを行っている。(週1回程度)

専2→副教材から生徒が語句を選んで作った短作文を添削し、語句の用法について解説している。学習した語句の意味や用法を定期テストで出題している。

<p>高3 「国語表現」語句の意味テスト ※選択問題を増やし、答えやすくした。 ※後半2問は難易度がやや高い問題を出題している。</p>	
--	--

高等部二年 国語表現 意味テスト P110 抄

一次の文の()にあてはまる語句をその口から漢字、語句の読み方も含めなさい。

- ミッシヨンを()する。
- 隣室に対して()をもつて欲しくない。
- 名屋井の「で」は方言であり、()である。
- 文学を()する。
- 実徳さんは()な顔つきをしている。
- 宝勳を()に、生活リズムが改善された。
- 保険の解約()余が入った。
- ()の意見を、よく聞いて決めた。

二 次の問題に答えなさい。

- あなたか、「私生活も整まそう」だと思つて他人の名前を()する。
- 次の()にあてはまる語句を答えなさい。

「の空本 脚本は、以前書かされたもの」だ。

今後の課題

- ① 語句の意味解説について、効果的だった指導方法を共有し、各学年の取組に生かす。
- ② テストの問題に答えられるだけでなく、生活に生かしたり文章に書くときに役立てたりすることが大切であることを前提に指導をしていく。
- ③ 各学年で行っている小テストをデータとして蓄積し、来年度以降の指導に生かす。また、指導方法やテストの改善のポイントを引き継げるよう、資料を作成する。

教科	重点目標	具体的方策	留意事項
地歴公民	・主体的に学び、考える力を育てる授業を目指す。	・生徒が主体的に学ぶことができるようにするために、1時間の授業の流れを明確にする。 ・話し合いがスムーズにいくために、話し合う視点を絞る。 ・ペア交流等話し合う環境を整える。	・授業の流れが視覚的に分かるような掲示を行う。 ・話し合うための発問を工夫する。 ・ペア交流等の話し合いの仕方を指導する。 ・月に1回程度科会を開き、授業や生徒等の情報交換を行う。

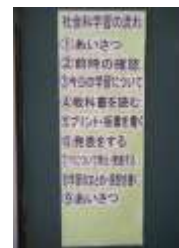
中間報告

授業の流れが視覚的に分かるような掲示を使用することで、少しずつではあるが、生徒一人一人が授業の流れを理解して、授業に臨むようになった。

話し合うための発問を工夫して授業を行っているが、話し合うところまではいかず、発表をするだけになっている。(意見に付け足したり、反対意見を言ったり等はできていない。)

話し合い方のモデル授業(ディベート・ポスターセッション等)や話し方を指導していく必要がある。

授業に関することや新学習指導要領についての内容などは、回覧等で情報を共有することができた。しかし、授業改善に向けて今後さらに取り組む必要がある。



<高等部1年で使用>

今後の課題

- ① 生徒が主体的に学ぶための具体的な方策をさらに考えて、授業改善に取り組む。
- ② 考える足場を作るための資料や、発問の工夫をしていく必要がある。
- ③ 1時間の中で話し合いができる場面を作って授業を進める。
- ④ 授業改善に向けた教員同士の参観授業を行う。

*ポスターセッション：報告や内容をまとめてポスターのように掲示し、その前に立って説明を行うこと。

*学習指導用要領：学校教育法施行規則の規定を根拠に、各教科で教える内容を定めたもの。

2020年より小学校から改訂される。(中学校2021年改訂、高等学校2022年改訂)

教科	重点目標	具体的方策	留意事項
数学	・解を導く過程を的確に理解し、類題に積極的に取り組む態度を養う。 ・習得したことを説明する力を培うように働きかける。	・学習内容を理解する上で効果的であった視覚的な教材やその提示の仕方について、継続的に情報交換をする。 ・日々の授業の中で、仲間とともに課題を解決したり、考え方を共有したりする場면을日常的に設定する。	・卒業後に求められる数学に関する基礎基本を教員間で共通理解した上で日々の指導にあたる。 ・数学用語に関する手話表現を統一し、生徒がスムーズに学習内容を理解できるようにする。 ・定理等の応用の仕方や接続詞等の使い方にも注目し例題等の解法を的確に読み取ることができるようになる。

中間報告

- ① ペア学習の中で生徒同士でやりとりをしたり、クラスメートの前に立ち説明したりすることを繰り返すことで、今まで曖昧に理解していた部分を意識することができ、より確かな理解へとつなげていくことができてきた。
- ② テストに出そうな内容を予想することを通して、ポイントとなる考え方や重要な定理などに対する意識の高まりが感じられるケースも増えた。
- ③ 学習したことが日常生活場面でどのように生かされているのかについて紹介することや、学習したことを体験する授業展開を通して、学習したことを身近に感じられるようになった。また、数学を学ぶことの意義についても感じられるようになった。

今後の課題

- ① より確かな理解へとつなげるためのツールとしてタブレット端末等を活用することや、視覚的な教材の提示方法についての情報交換を引き続き継続していきたい。
- ② 説明する側の生徒は自分なりの言葉で説明するものの、説明を聞いている生徒が理解しにくいケースもしばしばあったので、両方の生徒に対する適切な働きかけを指導者側も心掛け、説明する力や聞き取る力の向上につなげていきたい。
- ③ 今年度の高等部本科卒業生・専攻科修了生の就職活動において課題となってきたことについて情報収集することを通して、職場で求められる数学に関する基礎基本を把握し、数学科として取り組むべきことを教員間で共通理解する。

教科	重点目標	具体的方策	留意事項
理科	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が知識を増やし理解を深める指導法の確立を目指す。 	<ul style="list-style-type: none"> 科学的な研究を参考に指導法を改善し実践する。 既習学習を繰り返し確認する。また、生徒が教科書の内容を説明したり、確認テストを頻繁に行うなどアウトプットできる機会を多くつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> 指導の効果については同形式で行うテストの点数の変化で確認する。 授業の進度が遅れないようにする。

中間報告

「学力の経済学（中室牧子著）」では読書力と学力に因果関係がないこと、「AI VS 教科書が読めない子どもたち（新井紀子著）」では読書習慣も学習習慣も読解力の因果関係にはならないことが科学的根拠を基に述べられていた。しかし、学力と読書力や読書習慣は因果関係がないと言っても、相関関係がある。読書力と学力は“にわとりと卵”のような関係（「学力の経済学」）であるという。また、読解力の中では、推論と同義文判定が学力に大きな影響を与える（「AI VS 教科書が読めない子どもたち」）という。このことを基にして地学基礎の授業での指導法の改善を試みた。

基本的には「教科書を生徒が読む（従来から行っている）。そして、その文の内容を生徒が説明する。教師は生徒がその文を正確に理解して読めているか確認し、その文のバックグラウンドについて説明する。」ことを繰り返した。

例えば、教科書の文「川から海に運ばれた砂や泥のうち、海岸付近では波浪や水流が強いため細粒の砂が堆積することが多い。」を生徒に自分の言葉で説明してもらおう。だいたい説明できるが、波浪という語句を抜きにして説明することが多い。それで教師から波浪について説明する。次に、砂より大きいと学習してきたれきはなぜ登場しないのか、また泥はどうなるのかなど考えてもらい、この教科書の文に含まれているバックグラウンドを説明する。このようなことを一文一文繰り返した。

授業の最後に確認テストを行っており生徒も試験に向けた学習のよりどころにしているが、授業の内容を説明できるようになることが記憶に残ることにつながるの、これが実施できるように授業を改善していきたい。

今後の課題

どのような授業が生徒の学力につながるのかを考えるため、科学的根拠（エビデンス）に基づいた4冊の本「記憶力を強くする（池谷裕二）」「学力の経済学（中室牧子）」「間違いだらけの学習論（西本克彦）」「AI VS 教科書が読めない子どもたち（新井紀子）」で確認した。これらに書かれている新しい考え方や内容は授業を行う上で教師が知っていた方が生徒の学力の向上に効果的であると考えられた。今後それらを積極的に取り入れながら授業を行っていきたい。

教科	重点目標	具体的方策	留意事項
外国語	・英語の語彙力向上を図り、基礎的な言語力の拡充を目指す。	・学校独自にレベル分けした英単語テストを作成し、各授業内で定期的実施する。その際、単語の意味、発音だけでなく、一般動詞の三単現や過去形など、語形変化も出題する。 ・テスト結果を振り返り、生徒が自分に適したレベルのテストに挑戦できるようにする。	・学部ごとに英検や大学入試対策など、用途に応じてレベル調整ができるようにする。 ・英語の語彙力を英文の読解力へ結び付けることができるよう、英文を読む問題に取り組む時間も確保する。 ・1～2か月に1回科会を開き、情報交換をする。

中間報告

科会にて、英単語テスト問題の作成に対し、以下の方針を確認した。

- ①初級（中1～2年）、中級（中1～3年）、上級（高等部）に分けて作成する。
- ②問題形式はすべて選択問題（三択もしくは四択）とする。
- ③問題内容は、意味理解（英語→日本語、日本語→英語）、語形変化、スペル、発音の5部門とする。
それぞれ20問ずつ、計100問とする。（図1参照）実施時間は、授業時間内とする。
- ④結果については、分析、各部門のコメントをつける。（図2参照）
まず、初級問題を作成し、2学期に実施する。その結果をもとに、生徒たちがどの部門の力をつける必要があるか分析し、問題を改良していく予定である。

○英語→日本語、日本語→英語 問題

1. morning **1. 妻**

① 正午 ① wife
② 昼 ② sister
③ 朝 ③ daughter

○語形変化 問題

1. Takeru be a good tennis player.

① am ② is ③ are

○スペル 問題 ○発音 問題

1. 12月 **1. twelve**

① Dicember ① トゥオルベ
② December ② トゥエルヴ
③ Decembar ③ トゥワルベ

※サンプル

名古屋健学校 英単語力検査結果

受験者氏名 ○○ ○○

☆今週の検査結果

英→日	日→英	語形変化	スペル	発音	合計
17	10	10	7	15	67

第1図

☆今週の検査結果は正のところです。
全般的に、英単語の力がついています。
・意味の把握は、日本語から英語、英語から日本語の両方も、おのおの把握できています。この様子で単語の意味を覚えていきましょう。
・語形変化は、まだ理解できていないところが見られます。単語帳からや過去形、進行形の学習に前向きなしましょう。
・スペル問題は、まだ勉強ではありません。今日、間違えた単語を何回も書いて覚えるようにしましょう。
・発音問題は、もう一息です。やばい、間違えた単語を何度も書いて覚えていきましょう。

部門ごとに、結果に応じて2行程度のコメントを記入。

図1 問題

図2 結果分析表

今後の課題

- ① 問題作成様式について（現在はwordにて作成。作成の自動化を目標に、Excelへの移行方法を検討する。）
- ② 問題作成頻度について（作成に非常に時間がかかるため、実施頻度、問題の更新頻度を検討する。）
- ③ 上級問題（高等部対象）の出題単語の選定。
- ④ テスト後の展開について、結果の活用や、どのような方法で定着を目指すのか検討する。

《いじめ防止に向けた取組》

重点目標	具体的方策	留意事項
<p>○いじめの早期発見に努める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・情報集約担当（生徒指導主事）が、生徒情報を文章化した「週報」を作成し、関係する教員と共有することで、生徒の状況を把握しやすくする。 ・担任が一人で悩まないように、養護教諭や相談担当と連携し、「保健室」や「心の相談室」の活用を促す。 ・「週報」を活用し、生徒指導主事、相談担当、養護教諭等で意見交換する場を週に1回設ける。 ・年3回いじめ不登校対策委員会（定期）を開き、いじめ問題に組織的に取り組むための「いじめ防止基本方針」の確認や生活アンケートの結果報告を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒情報を共有する際には、進捗状況を確認するとともに個人情報取扱に気を付ける。 ・学年主任を中心に、教員間の連携促進をお願いしていく。 ・教員が1人で抱え込まない環境づくり、また生徒がSOSを出せる環境づくりを職員間で意識し、教育活動にあたるように声かけをしていく。
中間報告		
<ul style="list-style-type: none"> ・「生活アンケートをすることがいじめの早期発見にはつながらないこと」、「普段からの生徒との会話や何気ない変化を見逃さないこと」など、学年・担任を中心に生徒の様子に気を配る体制づくりに努めていくよう、いじめ不登校対策委員会や職員会議等で、声かけをしている。 ・生徒情報は、情報集約担当（生徒指導主事）がとりまとめており、「週報」にまとめ、必要があれば学年担当者に伝えている。 ・生徒指導主事、心の相談担当（特別支援教育コーディネーター）、養護教諭、寄宿舎指導員長が毎週1回集まり、生徒情報の共有と支援方法の検討を行っている。 		
今後の課題		
<ul style="list-style-type: none"> ・「いじめを見逃さない」という教員の意識の継続と向上のために何ができるかを考える。 ・生徒情報の適正な管理や共有の仕方を検討する。 ・生活アンケートの質問内容を検討し、分析方法の確立をする。 		

《多忙化解消に向けた取組》

重点目標	具体的方策	留意事項
<ul style="list-style-type: none"> ・仕事の効率化や在校時間の縮小に取り組みながら、教員が自己の健康管理や働き方に対する意識を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各校務分掌で業務を整理し、マニュアル化を進める。 ・水曜日を部活動休養日とする。 ・平常は20:00を施錠時刻とする。定時退校日は18:00を施錠時刻とし、月3回設定する。 ・施錠時刻と年休取得の統計をとり、働き方の傾向や変化を考察する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各校務分掌のマニュアルを一つのマニュアル集にまとめ、内容を周知して有効活用する。 ・有意義な時間の使い方について生徒に指導する。 ・部活動を実施しない日に定時退校日を設定する。 ・教頭・部主事は勤務状況を観察して個別に相談や面談を行い、長時間労働の改善や年休取得の促進を図る。 ・月別、部別、校務分掌別など、多面的に考察する。

中間報告

校務分掌による業務の整理とマニュアル化は今後の課題である。教員の在校時間については、平成26年度から5年間の月別平均施錠時刻を集計している。(表1) 平均施錠時刻は、全体的に年々早くなっていると言えるが、今年度は4月初めの10日間と7月の期間は前年度より遅くなった。

(表1) 月別平均施錠時刻 (平成30年9月12日現在)

	H26	H27	H28	H29	H30	前年比	H28～平均
4月初め10日間	23:30	22:42	22:02	21:56	22:14	+18	22:04
4月	22:33	22:18	21:36	21:21	21:10	-11	21:22
5月	21:02	20:34	20:38	20:25	20:22	-3	20:28
6月	20:52	20:50	20:31	20:14	20:07	-7	20:18
7月	21:11	21:28	20:40	20:25	20:29	+4	20:31
9月	20:53	20:37	20:13	20:20	20:14	-6	20:16

今後の課題

各校務分掌で、引き続き効率化の観点で業務の反省と見直しを行う必要がある。また、マニュアルの充実と活用を図りたい。教員の在校時間に関しては、定時退校日が昨年度よりも1時間早くなったことが平均施錠時刻に反映しているが、日々の教員の退校時刻に大きな変化はない。個人別の在校時間の差が大きいので、個人的な仕事の分担や仕事への取り組み方について考慮する必要がある。月別の行事や仕事の特徴を分析し、見直しをもって計画的に業務を遂行できるようにするとともに、各月の仕事量を分散する方策を考えたい。